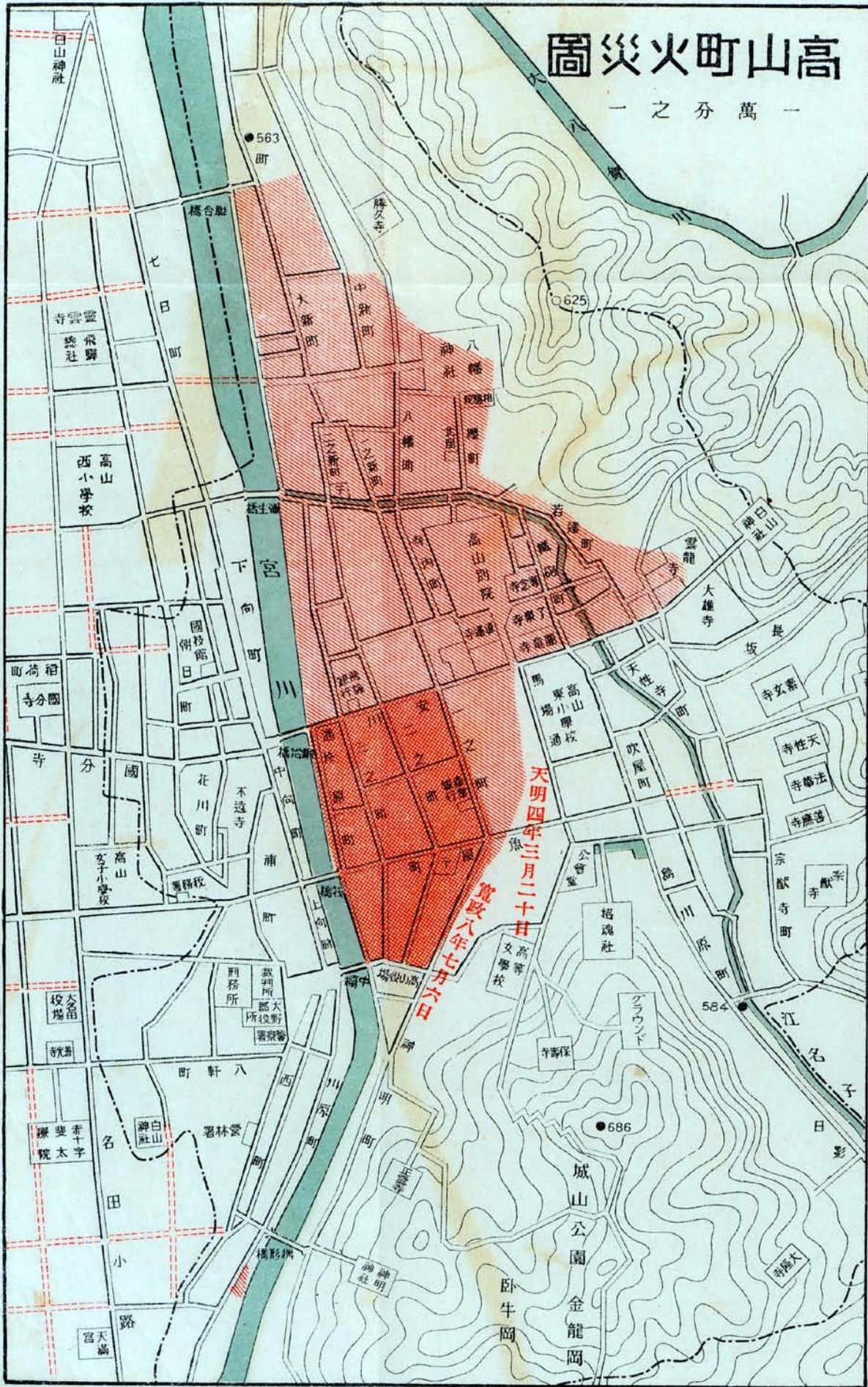


# 高山町火災圖

一之分萬一

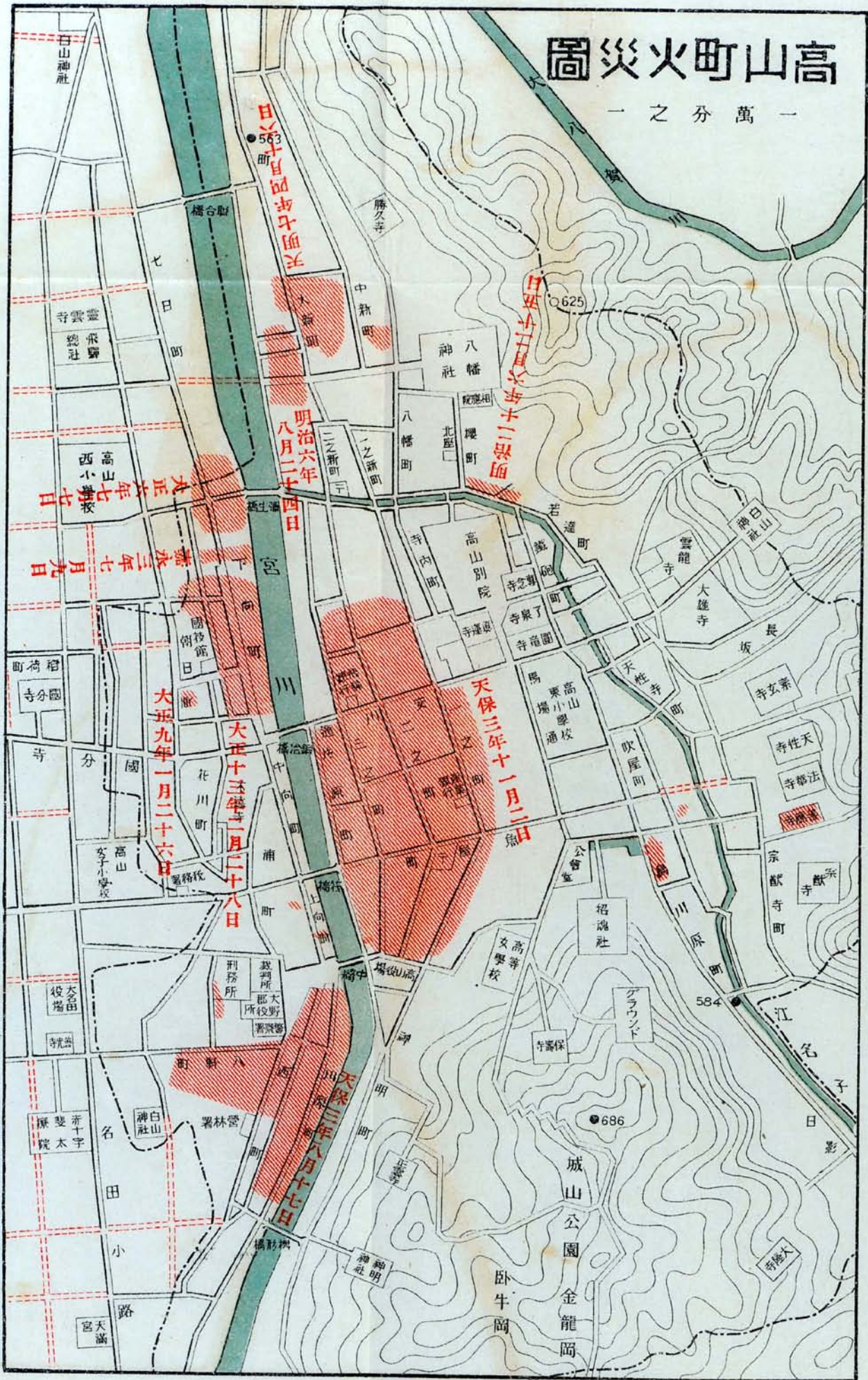


慶長元年十二月二十二日照蓮寺放火三町延焼及及び享保十四年三月八日立  
 寺内町出火九百七十五戸焼失の區城明瞭ならざりよ地圖省略す



# 高山町火災圖

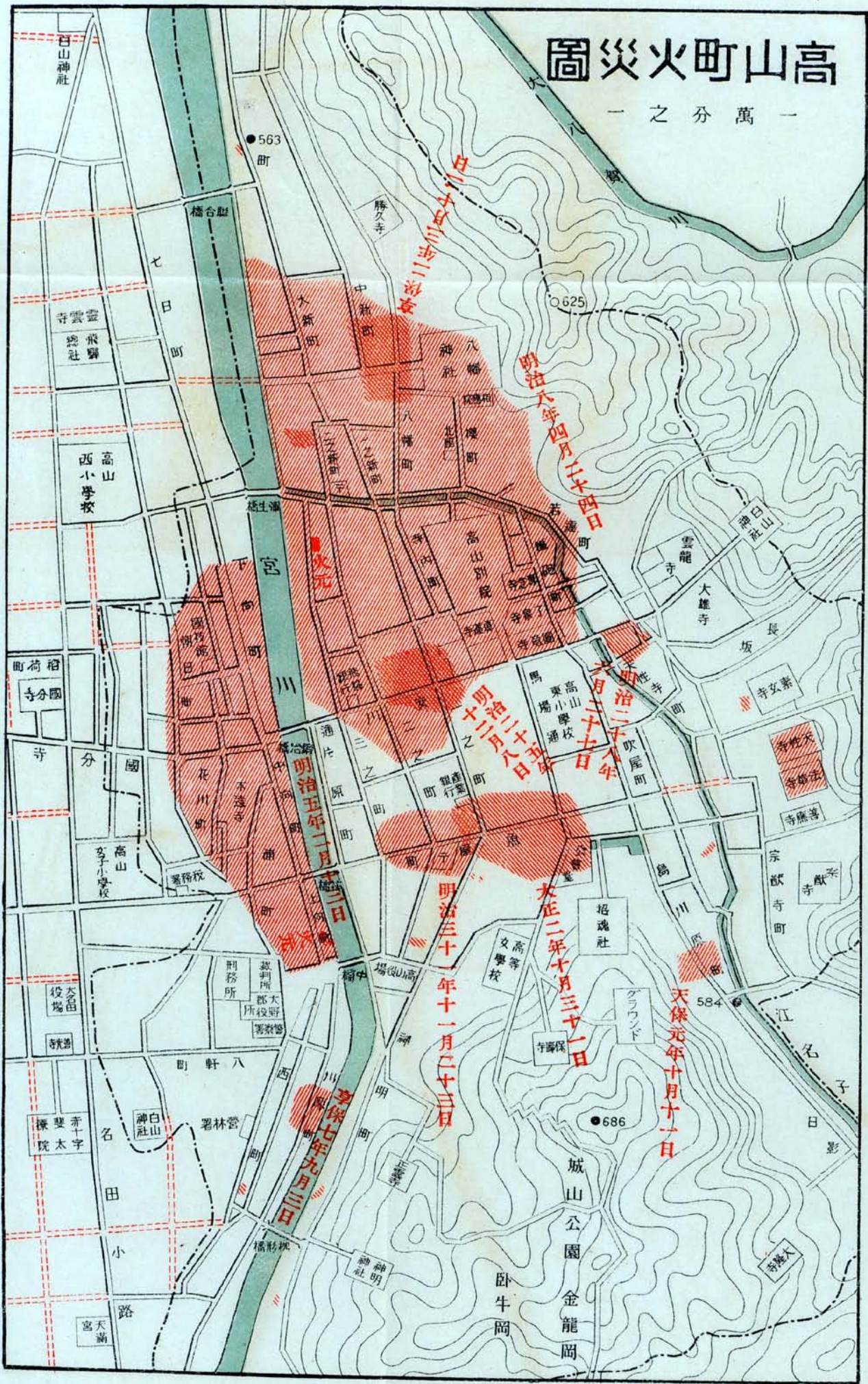
一之分萬一





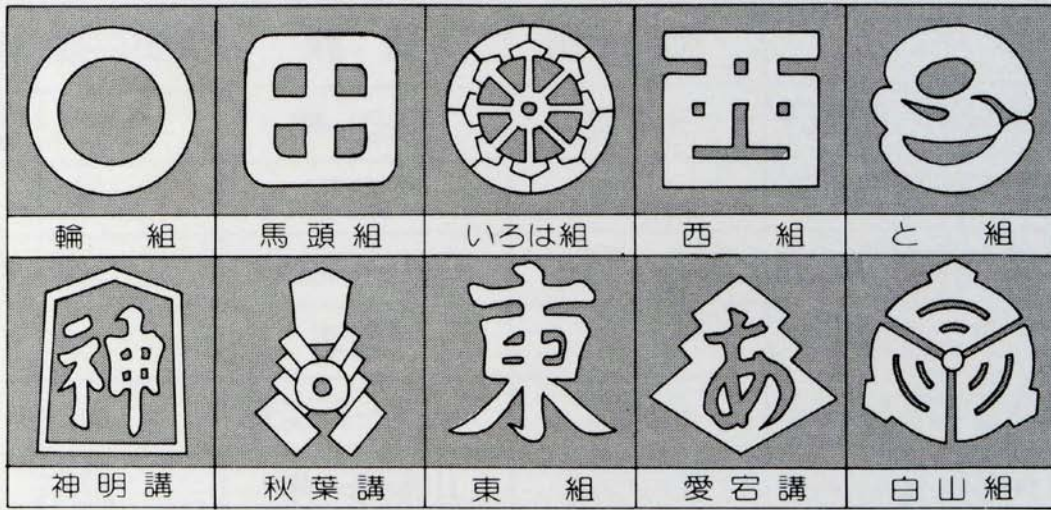
# 高山町火災圖

一之分萬一





火 消 10 組 の 目 印



(各組のまとい、旗等を参考に作成)

昭治12年11月 高山町消防組人員・器械数

組名	人員	戸数	纏	梯子	水籠	龍吐水	鳶口	打消	雁股	合図	目印
輪組	107	217	3	2	155	15	50	20	2	半鐘	輪
馬頭組	103	345	3	2	155	10	50	20	2	法螺貝	馬の轡
いろは組	75	440	3	2	100	5	30	10	2	分銅形鐘子	源氏車
西組	37	36	2	1	20	5	20	10	0	法螺貝	西の字
と組	88	115	2	1	25	7	21	8	1	五角鐘子	との字崩し
神明講	87	485	4	2	155	15	50	20	2	鐘子	将棋の駒に神の字
秋葉講	107	736	4	3	155	15	50	0	0	ドラ	蛇の目
東組	59	362	2	1	25	3	20	10	2	ラッパ	東の字
愛宕講	62	298	3	2	20	0	30	0	1	太鼓	松川菱にあの字
白山組	82	287	2	1	30	2	40	10	2	ドラ	白の字崩し
計	759	3319	25	17	840	77	361	108	14		

(第29図)

(28) 『高山消防』巻末添付図 高山町火災図、火消組目印 (第26~29図)

年代 大正15年5月8日発行

編集 山田松吉

印刷人 住廣造

寸法 第26~28図 21.0×12.5

所蔵 高山市教育委員会

第26図は天明4年(1784)3月20日の火災範囲と、寛政8年(1796)7月6日の火災範囲が赤で記される。天明4

年の火災は、『高山消防』65頁の高山町火災年表の記載によると夜9ツ時(午前0時)、一之町2丁目から出火し、2,342軒が全焼し、寺院11カ寺が燃えたとある。

寛政8年の火災は、夜寅の刻(午前3~5時)に三之町2丁目から出火し、442軒が全焼したとある。

天明4年の大火は、北は大新町から南は町会所(神明町・高山町役場)までと、空町の照蓮寺(高山別院)周辺などが焼ける大火であった。

寛政8年は東西の安川通り以南の大火であった。

第27図は天明7年(1787)、天保3年(1832)、嘉永3年(1850)、明治、大正時代の類焼図である。天保3年11月の大火は498軒(火災年表)が全焼した。同年3月にも東川原町で、119軒が全焼した。

第28図は享保7年(1722)、天保元年(1830)、明治、大正時代の類焼図である。この中で、特に大きな火災は明治8年4月24日の大火災で、午前11時30分、二之町家屋の薪小屋より出火、1,032軒を全焼(高山の火災年表)した。現在に近い時期で類焼軒数の多かった大火はこれが最後となる。大正9年よりガソリンエンジンの消防ポンプを導入、以後消防の機動力は増し、大火が減少してゆくことになる。

明治8年の大火は広範囲であったが土蔵は類焼せず、土蔵屋根の復旧、町家の再建も進んで以前の整然とした町並みが整備されていった。第29図は、明治12年の火消組まとい目印と人員等である。

各組のまといと旗の目印を参考にして、10組の目印を整理したものである。第22図に高山町夜番所位置図を掲載しているが、高山城下町の火災予防に火消組は大きく貢献してきた。

天明3年(1783)正月、大原郡代は、大工、木挽職の152人に火消の役を勤めさせ、木製の御用印鑑を持たせた。文化11年(1814)には夜廻りが始まり、文政13年(1830)から5つの火消組ができ、「講」もできて10組となった。

嘉永4年(1851)には陣屋前で火消組が駆け出しを行い、これが出初式の始まりといわれる。

※掲載されている情報(文章、写真など)は、著作権法上認められた例外を除き、高山市教育委員会に無断で複製・引用・転用・転載などの利用をすることはできません。